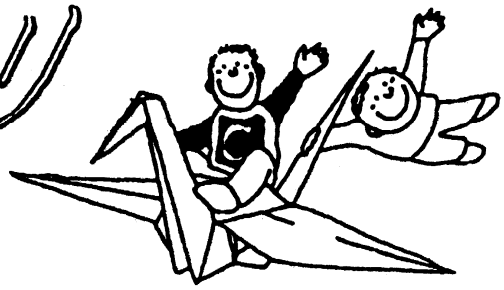
「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」ニュース　１１４号　　２０１８．１０．２

ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



フクシマからチェルノブイリへ
ロシア・ベラルーシのチェルノブイリ被災地訪問

★チェルノブイリ被災地に日本からの支援を届けます

★フクシマ事故被害者とともに、視察・交流をしてきます

１０月１７～２２日（前半）、１０月２６日～１１月５日（後半）に、ロシアとベラルーシのチェルノブイリ被災地を訪問します。（別記、予定表参照。）

前半は、事務局の振津が松川さん（モスクワ在住・通訳）とともに、例年通り、ベラルーシの汚染地クラスノポーリエとチェリコフの学校・幼稚園・障がい者リハビリセンター・病院・子どもたちの社会保護施設など訪問し、日本からの支援を届けます。また、ミンスク・マリノフカ地区の「移住者の会」にも支援を届け交流します。そして後半の福島県からの訪問者（３人）の視察・交流の受け入れ準備と打ち合せも行います。その後２６日に福島からの訪問者とモスクワで合流し、ロシアのチェルノブイリ被災地ノボジプコフ（ブリャンスク州）、そしてベラルーシの被災地を訪問します。「救援関西」がコーディネートをして、フクシマ事故被害者の方々とともにチェルノブイリ被災地を訪問するのは、今回が初めてです。

私たちはフクシマ事故後、これまでの「救援関西」の２５年以上にわたるチェルノブイリ支援・交流の経験を、フクシマ事故後の被災地での被ばく防護、健康と生活を守るための活動、放射線教育などに役立ててもらいたいと、フクシマに通い続け、関西では「保養」支援の取り組みなどにも協力してきました。また、私たちの友人であるチェルノブイリ・ヒバクシャの方々とともにフクシマ事故被災地を訪問し、二つの原発事故の被害者どうしの「顔の見える」交流にも取り組んできました。そして「チェルノブイリ３０年・フクシマ５年」の 2016 年には、「チェルノブイリとフクシマを結んで、チェルノブイリとフクシマを繰り返させない、事故被害者の人権と補償の確立を、フクシマを核時代の終わりの始まりに」と、多くの皆さんとともに「国際シンポジウ

佐藤さん宅にて

ム」（大阪）にも取り組みました。

今回のフクシマ事故被害者のチェルノブイリ被災地訪問は、27 年にわたる「救援関西」の支援・交流活動と、フクシマ事故後の「チェルノブイリとフクシマを結ぶ」活動をベースに実現したものです。訪問先は、いずれもこれまでにフクシマ事故被災地を訪問したチェルノブイリ被災者の方々が暮らしている街や故郷です。そしてフクシマからの訪問者は、これまでのチェルノブイリからフクシマへの訪問・交流の受け入れに福島で協力して下さった方々で、「チェルノブイリ被災地での生活は？」「事故後の政府の施策は？」「放射能に対する人々の認識は？」「どのようにして被害者団体をつくり権利を求めていったのか？」「これまでにフクシマに来てくれた人々を、その方々が暮らす被災地に訪ねて再会したい」等々、訪問前の抱負を話されています。今後のフクシマ被害者の健康と生活を守るため、またこのような原発重大事故と核被害をこれ以上繰り返させないための連帯した活動につながるような交流・視察の一歩になるよう、一緒に取り組みたいと思います。

チェルノブイリ支援と、フクシマからチェルノブイリへの交流訪問へのご協力、カンパもよろしくお願いします。１２月９日の「救援関西・発足２７周年の集い」（催しの案内２０頁参照）で、訪問報告をしますので、ぜひご参加下さい。

福島からの参加者：

・佐藤龍彦さん：楢葉町在住。７年間の避難生活を強いられる。今年４月に再建した楢葉町の自宅に高齢の母親とともに夫妻で戻り、「元の生活」には戻れない地域の現状に向き合っている。

・角田政志さん：福島市在住。福島県教職員組合委員長。

・中村孝太郎さん：石川町在住。町会議員。

＊ベラルーシ訪問（後半の視察・交流予定）

月日	移動	予定	宿泊
10 月 26 日	成田−モスクワ	移動	モスクワ
27 日	モスクワ−ノボジプコフ	モスクワ見学，夜行で移動	車中泊
28 日		「ラディミチ−チェルノブイリの子どもたちのために」訪問・交流	ノボジプコフ
29 日	ノボジプコフ−モスクワ	ノボジプコフ視察：学校, 病院, 衛生局, 等	車中泊
30 日	モスクワ−ミンスク	移動	ミンスク
31 日	ミンスク−ハティン−ナローブリア	「ハティン平和公園」見学	ナローブリア
11 月 1 日		ナローブリア視察・交流：学校, 病院, 衛生局, 汚染ゾーン, 等	ナローブリア
2 日	ナローブリア−クラスノポーリエ	クラスノポーリエ視察・交流：教育委員会表敬訪問, 学校, 病院, 衛生局, 障がい者リハビリセンター, 等	クラスノポーリエ
3 日	クラスノポーリエ−ミンスク		ミンスク
4 日		マリノフカ「移住者の会」交流	ミンスク
5 日	ミンスク−モスクワ−成田へ	移動	機中泊
6 日	成田着		

【「移住者の会」代表のジャンナ・フィロメンコさんの来日報告】

～ベラルーシからヒロシマ・ナガサキ、フクシマを訪ねて～

チェルノブイリ・ヒバクシャの想い

チェルノブイリ原発事故から３２年を経たベラルーシから、「移住者の会」代表のジャンナ・フィロメンコさんが、原水禁国民会議の招聘で来日し、８月４日～９日に広島・長崎で開催された「被爆７３周年原水禁世界大会」に参加しました。２０年余にわたり「移住者の会」へ支援・交流を行ってきた「救援関西」としてジャンナさんの来日をサポートし、原水禁大会に一緒に参加しました。また、「チェルノブイリでも被害者の次の世代、孫たちの健康が心配。日本では被爆者の次世代にどのような施策がされているのか知りたい。」というジャンナさんの希望もあり、７日に長崎で「全国被爆二世団体連絡協議会」の方々とも交流しました。そして大会後の１０、１１日は、ともに福島を訪れ、浜通の被災地を視察し、浪江、楢葉、いわきで福島原発事故被害者の方々とも交流しました。最終の１２日には、大阪で交流集会を持ちました。

ジャンナさんは各地の講演や交流の場で、チェルノブイリ事故被害者としての自身の体験を語られました。そして広島・長崎の被爆者や被爆二・三世の方々、福島事故被害者の方々と、顔を見て直接お互いの体験を語るなかで、核被害者が共通した悩みや苦しみを抱えていることを感じておられました。自分や家族の健康問題と次の世代の健康への心配。「差別」の問題。友人や親戚、地域の繋がりがバラバラにされたこと。移住や放射能汚染によって生業を失い、生活全体が変わってしまったこと。あの事故さえなければ…と考える、そういう苦しみの中で、被害者の権利を求めると同時に、二度とこのようなことを起こしてほしくないと訴える強い想い。そのような同じ想いが、広島・長崎・福島を訪ね、被害者と直接に語り合う中で通じ合い、核被害者の連帯の基礎として確認されたように思います。

「救援関西」の活動も今年で２７年になります。９０年代のソ連崩壊後の困難な時代に私たちが送ったささやかな支援が、チェルノブイリ被害者の生活と健康に大きな助けになったということもジャンナさんは話して下さいました。

米国のオバマ前大統領は「空から死が降ってきた」と広島で演説しましたが、そうではなくて原爆を投下した米国、それに至る侵略戦争を起こした日本があったのです。福島でも、東電の原発が事故を起こし、地震国日本で危険な原発を国策として進めてきた政府があります。そしてチェルノブイリでも、国策として核利用が進められてきました。核利用を進める加害者に対して、核被害をもたらした責任を厳しく問わなければなりません。ジャンナさんたち核被害者＝ヒバクシャの想いを受け止め、ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリ・フクシマを結んで、核被害者の人権と補償の確立をめざし、これ以上核被害を繰り返さないために、核兵器も原発もなくしてゆく取り組みを強めましょう。今回のジャンナさんの来日交流も、そのためのささやかな一歩になったのではないかと思います。

（事務局・振津）

～ジャンナさんのお話～

核被害者として語り続け、世界から核をなくす

広島・長崎を学んだが、「平和の核」といわれた原発で被害にあうとは…

こんにちは。私はベラルーシから来ました。ジャンナ・フィロメンコと申します。

禎子さんの像の前で

もちろん広島・長崎のことは、子どもの頃に学校で習い、原爆によってどのようなことが起こったのかということも勉強しました。でも、「平和の核」と言われる原発で、同じような被害がベラルーシで起こるとは、夢にも思っていませんでした。私はソ連時代に生まれ、人生の半分以上をソ連時代で過ごしました。当時、全ての学校で広島の佐々木禎子さんのことを子供たちに教えていました。禎子さんだけでなく、同じように被爆された方々がおられ、７０年以上経っても被爆者の方々、被爆二世の方々が同じように苦しんでおられることはベラルーシでも知られています。

国土の２３％が汚染されたベラルーシ

1986年４月２６日にチェルノブイリ原発事故が起きました。その被害を受けた人は何百万人にものぼります。チェルノブイリ原発はウクライナに建てられた原発ですが、ベラルーシとの国境近くにあります。ベラルーシはそれほど大きな国ではなく、1000万人にも満たない人口の国です。ベラルーシの国土の２３％が放射能で汚染されました。ウクライナでは4.5%、ロシアは0.5%です。

事故直後は公の情報がなく住民が被ばく

私はチェルノブイリ原発からわずか４０kmしか離れていない、ナローブリアという小さな街に住んでいました。事故当時、私には２歳半と５歳半の二人の男の子がいて、夫がいて、私もまだ若かったです。事故が起こった時には、私たち住民には何も知らされていませんでした。

今回、私は福島も訪問し、浪江町で原発の近くの港（請戸）で操業されていた高野さんという漁師さんとお会いしたのですが、その方も福島第一原発で事故が起こった当時は情報が全くなかったと言っていました。高野さんは、浪江町では原発に仕事で通っている職員の方々がいて、その人たちが、地震が起こった後に町に帰ってきて、爆発が起こる前から「どうも放射能漏れがあるらしい」という話しをしていたそうですが、公式の発表はなかったと話していました。全くそれと同じで、私たちの街にもプリピャチに原発の仕事で働きに行っている人がいて、その人たちが「どうも原発で火事が起こっている」ということを私たちに知らせてくれました。４月２８日になってやっと、当時のソ連の通信社のニュースで正式に「チェルノブイリ原発で小さな事故がありました。現在、事故収束中ですから心配しないで下さい。」という報道がありました。

当時は春で、いい気候でしたので、人々は普段と同じような生活を送っていました。畑を耕したり、子どもたちは外で遊んだり、学校に行って勉強したりしていました。私たちはもちろん心配しましたし、不安でした。様々な噂が飛び交っていましたが、街の行政は「大丈夫だ」と言って人々を安心させました。５月１日はメーデーの大きなお祭りがあって、その前日には中学生、高校生たちが駆り出されて街の清掃を行い、子どもたちは放射能で汚染されたチリを吸ったりしていました。そして５月１日には、

皆で外に出てパレードをしました。また当時は粉ミルクなどなかったので、親たちは地域で放牧されて、そこの草を食べた牛のミルクを子どもたちに飲ませていました。

３０km圏内の住民「避難」～未だに戻れない

一方、５月１日には原発から１０km圏内の住民、２日には２０km圏内の住民の避難が始まりました。そして３日になって、原発から３０km圏内の地域の人々の避難が始まりました。住民は「たいしたことない、すぐに戻れる、三日分の荷物と書類などを持って出かけるように」と言われました。しかしその後、３０km圏内の人々は二度と戻ることはありませんでした。当時、住民は、どうして自分たちが避難しなければならないか理解できず、特に老人たちは「何も起こっていないのになぜ避難しなければならないのか、戦争の時には逃げないといけないのは分かるが、どうして今、逃げなければならないのか分からない」と言って抵抗しました。そのような人々の中には、避難を拒んで地下に隠れた人もいます。

しかし、放射能はきれいに同心円状に広がるわけではありません。ベラルーシには原発から200kmも離れた所でもホットスポットが見つかっています。そして人々はそのようなことを全く知らずに、「避難指示が出ないのだから安全だ」と思って、その土地の作物を事故後２年半くらいは食べていました。

40km離れたナローブリアでも、混乱の中で子どもたちが「一時避難」

５月３日になって、４０km離れた私たちの街の子どもたちも避難を始めます。これは避難であって、一時的なものです。子どもたちの避難が始まる前の晩に役場の人が一軒一軒回ってきて、明日の朝に子どもたちを広場に連れてくるようにと伝えられました。子どもたちは朝９時に広場に集められ、そこにはバスが並んでいて、３歳までの子どもは母親と一緒に、４歳以上は親なしで避難をしました。その日はとても暑い日で、子どもたちはバスに入れられたのですが、どこに行くか決まっていなかったので、そのまま午後３−４時頃まで、ずっと留められていました。子どもたちは「家に帰りたい」「喉が渇いた」と言って泣き出すし、すごく悲しい状況でした。その時は５月で、まだ夏キャンプの準備ができておらず、子どもたちを収容する場所も決まっていなかったのです。子どもたちはある場所に行って、そこで断られ、そして他の所に移って、ということを繰り返し、一週間くらい地元で待つ親たちは子どもたちがどこにいるかも分からない状況でした。週末に子どもたちに会いに行ったら、そこにはいなくて、他の場所に行ったと言われ、子どもを探しまわる親もいました。

ジャンナさんの子どもたちは被ばくのためミンスクで入院

私の子どもたちは、私が仕事で付き添えなかったために、おばあちゃんと一緒にミンスクに避難をしました。ミンスクでは様々な汚染地域からの避難者が病院に収容されました。殆どの病院が緊急患者を除いて一般の患者を退院させ、被災者を受け入れました。同じ部屋に２ヶ月の赤ちゃんと母親、１４歳の子ども、そして私の２歳と５歳の子どもが入院していました。避難した時に子どもたちが着ていた服は没収されました。その小児病棟は、もともと１４歳から１６歳の子ども用だったので、私が面会に行った時には、小さな子どもなのに１４歳の子どもの服を着せられていました。医師たちはよく診てくれましたが、子どもたちの身の回りの世話をする衛生士さんたちは、子どもたちがチェルノブイリの汚染地域から来たということで、「汚染が移る」と思ってあまり近寄らなかったり、世話をしたがらないことがありました。２歳半の子どもは、食べさせたり、トイレに行かせたりしないと自分では何もできないのですが、ちゃんと世話をしてもらえないこともありました。

長男は高熱の後遺症のため「チェルノブイリの障がい者」と認定された

私の長男は避難する頃から少し熱があったのですが、ミンスクで高熱が出て、面会に行っても母親の私でも病室に入れてもらえず、三日間面会することができませんでした。その時の高熱の後遺症で、彼は障がい者になったのです。

今では彼は汚染地域に住んでいたことが原因で病気になったと認められています。1991年に移住が認められた時に、「病気と汚染地に住んでいたこととの関連が認められる」という制度ができたと聞き、私たちも医療機関に行って、自分の子どもの病気と汚染地に住んでいたことを関連づけてほしいと求めました。私たちはとても長い間、書類を受け取ってもらえず、「関連はない」と言われたのですが、さらに上の行政機関に子どもを連れていって、書類を受け取ってもらえるように求めました。その時にちょうど子どもに発作（てんかん）が起きて、それを見た職員が受理してくれたのです。当時、私の子どもも含めて５人の子どもが様々な検査結果、血液検査とかいろいろ提出して申請しましたが、そのうち３人は認定を拒否されました。長男は今は３８歳ですが、残念ながら自分の家族を持つことはできないでしょう。いつも誰かが介護をする必要があります。私がここにいる間は世話ができませんので、次男とその家族が彼の面倒を見てくれています。

簡単な「除染」が行われ、９月には高汚染地域に子どもたちが戻ってきた

事故があった年の９月１日には、私たちの街に子どもたちが戻ってきました。子どもたちが戻るまでに、街では除染が行われました。除染というのは、家の屋根を水で洗浄するのですが、その水は全部、軒下に流れ落ちたままでした。そして学校や幼稚園、その周辺の表土を20cmはぎ取ってアスファルトを敷いたりもしました。はぎ取った土はどこかに持って行かれ、どこに持って行ったのか分かりませんが、たぶん郊外に捨てられたのではないでしょうか。そして「学校、幼稚園は除染したから、もう大丈夫で、街に住んでもいい」と言われました。

当時、ソ連では食糧不足、物資不足だったのですが、事故後は店の棚に沢山の商品が並ぶようになりました。おそらく政府は事故の重大さを知っていて、食品汚染のことも知っていたのでしょう。少なくとも食品は非汚染地域から運ばれてきたものが並ぶようになりました。

高汚染地からの移住を政府に求めた住民運動

私たちは、この地域には放射性物質が落ちて、かなり汚染されているということ、子どもと一緒にこの土地に住むのは危険であるということも次第に分かってきました。そして国に対して移住を求め始めました。第一に移住を求めたのは、子どものいる家庭です。住民は、例えば三日間のストライキを行いましたが、これはたぶんソ連史上初めてのストライキだったのではないでしょうか。そのようにして住民は、地域の官僚達に移住を求め、首都ミンスクの官僚たちにも移住を求めました。そしてカンパを募って、ミンスクに使節団を送ろうということになり、地域で集会を行い、バスを用意してミンスクに訴えに行きました。ソ連時代には、それまで私たちは自分たちの意見を表明して、政府に対して文句を言うということは全くしたことがなかったのです。ですから、このような活動のリーダーたちには、かなりの圧力がかかりました。

「チェルノブイリ法」ができミンスクに移住

1991年に「チェルノブイリ事故による被災者保護法」（チェルノブイリ法）ができました。15-40キュリー/km^{2}の地域からも、人々は移住しなければならないと、この法律で定められ、私たちの街からも移住が始まりました。始めは病気を持った子どもたちの家族を優先的に移住させることが決まり、子どものいる家庭のほとんどが移住を始めました。

ソ連崩壊の直前に「チェルノブイリ法」ができ、非汚染地域に被災者用の家が建て始められましたが、実際に移住が始まる頃にはソ連が（事実上）崩壊していましたので、私たちの避難先は全てベラルーシ国内でした。このようにしてベラルーシでは１２万人以上の人たちがそのような汚染地域から移住しました。

私たちの家族は、長男が障がい者だったので、優先的に移住が認められました。街では一番初めの移住で、1991年９月にミンスクに引っ越しました。なぜミンスクかと言いますと、自分たちで選んだわけではなく、病気を持っている子どもたちは医療の受けやすい所にということで、病院や医療センターのあるミンスクに引っ越すことになりました。1991年から92年の間に、モギレフ州、ゴメリ州の汚染地域からミンスクに、約１万人の移住者が引っ越してきました。

被害者の権利・保護を定めた「チェルノブイリ法」

「チェルノブイリ法」は事故被害者の権利を守る法律で、法律ができた当時は「移住者」に対しても様々な権利がありました。私たちが移住する前の1991年までにも、ソ連政府の決定としていくらかの支援がありました。例えば汚染地では給与が多めに支払われていました。これは、畑の作物が汚染されて食べられないので店で買わざるを得ず「食品手当て」として支給されたのです。また、子どもたちは年に１回、非汚染地での保養に行くことができました。学校に行っている子どもたちは年に２回行く事ができ、幼稚園児は親と一緒でなければ行けなかったので年１回でした。それは全部、（ソ連）政府の負担で行われました。また、幼稚園や学校の給食は無料でした。私たちの住んでいたナローブリアは地方の小さな街なので、必要であれば地域の病院の医師が紹介状を書いて、首都ミンスクのより大きな病院を受診することもできました。その後、このような被災者支援策も含めて「チェルノブイリ法」という法律になりました。

ソ連時代は国民全員が無料で医療を受けられたのですが（ベラルーシでは現在も国民全員が公的医療は無料、薬代は有料）、常に医療を受ける順番待ちをしなければなりませんでした。それがチェルノブイリの被災者は優先的に受けられるようになったのです。薬に関しても、子どもも大人も無料で手に入れることができるようになりました。他には、事故処理作業者は無料で公共交通機関を利用できました。また移住の費用は国が支援、つまり二台の車を用意されてそれで引っ越しをしました。移住後４ヶ月間、移住前と同じ給与を受け取ることができました。その他にも税金の控除とか、いろいろと支援がありました。

しかし、この法律で保障されていた被害者の権利は、1995年に現在のルカシェンコ大統領が政権に就いてからは、どんどん支援策が打ち切られ、今ではほとんど残っていません。現在、「移住者」の被害者としての権利としては、仕事に就いている人は、職場で一年中好きな時期に休暇を取ることができること。もう一つは、病気で仕事を休む時に医師の診断書を職場に提出しますが、チェルノブイリ被害者は病気で休んだ１日目から100％の給与を支払われます。一般の人は４日目からしか100％の給与が支払われません。このようなささやかな権利ですが、皆、夏に休暇を取りたいので、私たち被害者が優先されるということで、「どうしてこの人たちは夏に休めるのに、自分たちは冬しか休暇が取れないのか」と、職場では少し軋轢が生じます。

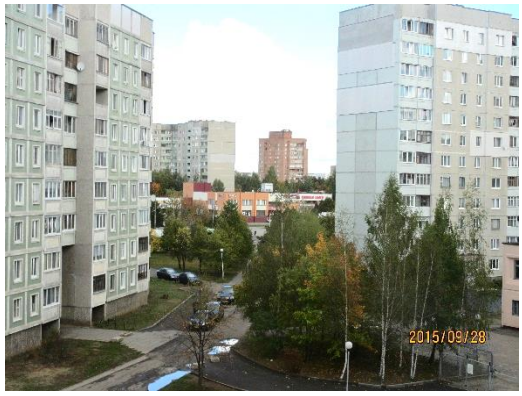
「移住者の会」で集まって話しをする時には、政府に資金がなくて経済的支援や手当てを支給することができないのであれば、せめて医療を充実してほしい。例えばガンや白血病の検診とか、様々な検査を受けられるようにしてほしいと話し合っています。

また法律では、支援を受けることのできる権利は「被害者とその子どもが対象者である」と明記されているにもかかわらず、私たち直接の被害者、つまり一世は「被災証明書」を持っていますが、二世はそのような証明書が交付されていません。

自分たちの権利を守るため「移住者の会」を結成

ミンスクに引っ越してから何か問題があって、地域のお役人にその問題を持ってゆくと、「あなたたちは移住が認められたのだから、自分たちの問題は自分たちで解決して下さい」と言われました。その当時、私たち女性はとてもアクティブで、自分たちの権利をどうにかして守らなければならないと考え、「移住者の会」という団体を作ることにしました。

ミンスクのマリノフカという地域にチェルノブイリの汚染地域から来た移住者が移り住み、私たちは「チェルノブイリの移住者」と呼ばれました。マリノフカ地区は、沢山のアパート、９階建て、１２階建て、そして入口（階段）が２４箇所くらいもあるような大きな建物が沢山ある所です。「移住者の会」では、まずそれぞれのアパートの入口（階段が同じ）の代表を決め、その人たちが各家庭を回って、どういう人たちが住んでいて、どこから来たのか、どういう援助が必要かということを調べました。



マリノフカ／月日が経ち木々も大きくなる

日本をはじめ世界からの支援～ソ連崩壊後の生活困難の中で大きな支えに

移住者は、殆ど何も持って来ることもできずに移住してきました。その頃は、ソ連が崩壊して物資が不足している時期でしたが、世界の人々が移住者の存在を知り支援してくれました。事故の６−７年後ですが、全世界の人々が、特に子どもたちを保養に招待してくれるようになりました。医師たちも、子どもたちは、年に１回、一ヶ月くらい、非汚染地域で汚染していない食品を食べるようにという助言をしていました。子どもたちを一番多く受け入れてくれたのはイタリアです。もちろん日本も受け入れてくれました。それに対して、大変感謝をしています。

当時９０年代には、ベラルーシには日本のことを知っている人は殆どいなくて、とても遠い国でした。日本の方々が受け入れてくれるということで、行く側も、どこに行くのか、どんな国か分からず心配しました。でも、きっと日本で受け入れる側も、どんな子どもが来るのか、何を食べるのかも分からず、お互い何も分からないにもかかわらず、受け入れてくれたことにとても感謝しています。

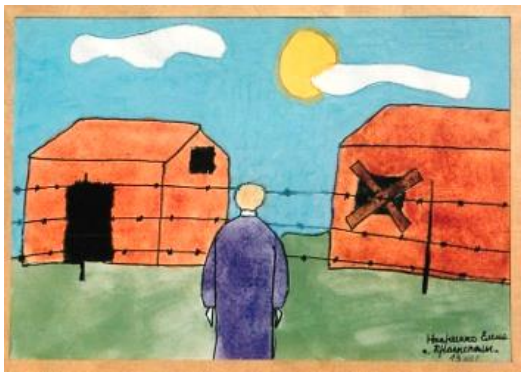
移住した当時は、ソ連崩壊と重なったために、私たちは大変、物資が困窮していました。例えば、朝、パンが工場から運ばれてきたら、朝のうちにすぐ売り切れてしまって、棚が空っぽになるという状況でした。今はそのようなことはなくて、店には何でもあり、９０年代のことは夢だったのではないかと思う時がありますが、実際にそのような状況でした。そういう状態の時に、日本の皆さんは沢山の援助をして下さいました。

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」も、子どもたちの健康を守るために、沢山の支援をして下さり、粉ミルクやベビーフードなどを送って下さいました。その粉ミルクはとても助かりました。ある母親には、その人の子どもが（体質的に）ベラルーシの粉ミルクを飲むことができなかったので、できるだけ優先的に、日本から送られてきた粉ミルクを回しました。また日本の皆さんは、ベラルーシの医師が日本で研修を受けるというような機会も与えて下さいました。今ではその医師たちがベラルーシで被害者の治療にあたっています。

私は「移住者の会」の代表として、そのようなことに感謝を申し上げたいと思います。それだけでなく、ベラルーシを代表して、ベラルーシの母親、おばあさんを代表して、感謝を述べたいと思います。今になって振り返ってみますと、その時の援助というのは、計り知れない大きなものだったと思います。

３２年経っても危険な高汚染地帯

私が申し上げたいことの一つは、チェルノブイリの被害は、この先もずっとベラルーシにあり続けるだろうということです。そして３０km圏内だけでなく、もっと広い範囲、モギレフ州、ゴメリ州の多くの地域がチェルノブイリのゾーンと言われる汚染地帯―保護管理区域に指定され、立ち入り禁止区域―になっています。そこに立ち入れるのは林業関係者、森林の専門家や動植物を研究している学者だけです。その立ち入り禁止区域には多くの動物や鳥がいて、ウクライナの方からは馬もやってきてイノシシなどもいます。立ち入り禁止区域なので、許可がないと一般市民は入れません。そのような地域にある485カ所の居住区が移住対象になりました。特に汚染の激しい地域では人々が自分達の家に戻れないように家を壊し地面に埋めた地区も多くあります。ベラルーシでは自分達が住んでいた家を人に見立てて「埋葬した」という表現をします。今でも、私が住んでいた地域より低い汚染地域には、人々が住み続けています。



チェルノブイリの子どもの描いた絵

立ち入り禁止区域でも、３２年経ったからもう危険ではないというわけではありません。冬になると木の葉が落ち、その葉は夏に乾燥すると火がついて森林火災を起こすことがあります。一昨年、ウクライナでかなり大きな森林火災がありました。原発の処理にあたった重機などを保管していた場所まであと２kmくらいまで迫るところで、やっと火を消し止めたという大変危ない状況でした。風に乗って放射性物質が、またベラルーシの方に来るというような危険性もありました。

ヒロシマ・ナガサキの被爆者、フクシマの被害者と同じ苦しみ

７３年前に原爆が投下された広島・長崎でも、被爆者や被爆二世、三世の方々が同じような苦しみを背負っていらっしゃいます。福島でも同じだと思います。私たち核被害者は、病院に行くと何か新しい病気が見つかるのではないかと心配になります。恐ろしいのは、やはりガンで、ガンは放射能と密接に関係があると思います。私たちは１０年後、２０年後に私たちの健康がどうなるのか、全く分かりません。

私の夫は３６歳で心臓発作で亡くなりました。彼は事故後、ナローブリアからの移住を求める活動をしていました。そしてミンスクへの移住がかなったその後すぐに、私の腕の中で亡くなりました。彼も30km圏内で働いていていました。

福島での津波被害や原発事故が起こった時、私たちチェルノブイリの移住者は、本当に日本の皆さんと同じような気持ちになって心を痛めました。それまで人々が、それぞれに行っていた普通の生活が、一瞬にして奪われてしまったのです。そしてその後も様々な病気などに悩まされます。私は、「もしチェルノブイリ事故がなかったら」とよく考えます。例えば、「もし事故がなかったら、夫はまだ生きていたかもしれない。」「もし事故がなかったら、長男は病気にはならなかったかもしれない。」と。私たち「移住者の会」でも、知り合いとか親戚が病気になったとか、亡くなったとかいうことを聞くと、「事故がなければそのようなことにならなかったのではないか」と話しをします。きっとそれは広島・長崎の被爆者の方々も、福島の方々も、同じではないでしょうか。「もし広島、長崎への原爆投下がなかったら…」「もしフクシマの事故がなかったら…」「もし核がなかったら、もしかしたら私の友だちは、私の家族や親戚はそういう目に遭わなかったのではないか」と、ずっと思い続けていかなければなりません。

健康被害だけではありません。放射能は、私たちの故郷を奪いました。家や故郷を奪っただけでなく、友人、親戚関係も壊されてしまいました。例えば私の妹はシベリアに移住をして、今では孫がいるのですが、めったに会うことができません。そして多くの移住者が、新しい土地で、それまで就いていたような仕事が見つからず、他の仕事に就かざるをえませんでした。私たちの地域は農業を営んでいた人が多かったのですが、新しい場所では農業ができないということがありました。このように一つの事故が、本当に多くの人たちに被害を与えます。原発重大事故の被害は世界的な問題で、国境、民族は関係なく、あっという間に被害が広がってしまいます。もちろん一番始めに被害を受けるのは原発の近くに住んでいる人々です。

核被害者が語り続けることによって、世界から核をなくすことができる

どうして私たち核被害者がこのように皆さんにお話をするのか、話し続けるのかというと、私たちひとりひとりが声をあげる、そして話すことによって、きっと世界から核をなくすことができると信じているからです。

私にとっては、自分の体験、家族に起こったことを話すのは大変辛いことです。私たちの不安はとても大きいのですが、それを少しでも減らしていく、未来に同じような思いをするような人を減らしていくには、このように自分たちの体験を語って、少しでも理解をしてもらうこと。そして核兵器はもちろんのこと、原発はなくしていかなければなりません。核廃棄物、使用済み燃料などは、どのように処理すべきかまだ決まっていません。私たちのような核被害者が、何十年後にどのような被害が出るかわからないという不安をずっと抱えていることを考えると、きっと原発や核兵器をなくすことが、解決に向けた近道だと分かると思います。

8月9日、長崎原子爆弾落下中心碑で(左端)

今回、広島・長崎でも、被爆者や「被爆体験者」の方々の話しを聞く機会がありました。その方々はかなりご高齢の女性で、それでも自分達の体験を語り継ごうと話しをされています。被爆者の方々は、まず、被爆した時に「子ども時代」を奪われ、きっと若い時には健康不安や実際に健康を害されたということで「若い時代」を奪われ、そして今は、かなりのご高齢になってもまた語り続けていくということで、安らかな老後生活を送ることはできないでいる。７３年というとても長い時間が流れたとしても、未だに未来のことを心配なさっています。私の場合もチェルノブイリ事故が私の「若い時代」を奪ってしまった。その時期に、私は子どもの健康の心配をずっとしていました。

今回、長崎では、被爆二世、三世の方々と交流させて頂きました。私はもう孫もいて、「おばあさん」になっているのですが、私たちの抱えている問題が共通していること、自分たちや子どもたち、孫への健康の不安が大きいということ、できるだけしっかりした医療を受けたいということ、それは同じだと思いました。

「チェルノブイリ人」と言われ…差別と向き合う

ミンスクや他の街に引っ越しをしてきて、私たち移住者にはアパートがあてがわれました。当時は、国民は皆、住居を国から受け取っていたのですが、私たちが入居したアパートも、きっと他のミンスク

の人たちにあたるはずだった住居が、急遽、私たち被災者に回されたのです。それでミンスクの人々から羨ましがられ、「私たちが住むはずのところにチェルノブイリの人たちが住んでいる」と言われたことがありました。

子どもたちはミンスクの学校に転校しましたが、周囲の人々は、私たちの子どもたちが移住者だということを知っていますので、例えば隣に座りたがらないとか、放射能が移るかのように怖がられるということがありました。また、成長して男の子と女の子がつき合ったりするようになると、「あの子は移住者の子だからつき合うのをやめた方がいい」とか言われることもありました。

多くの人たちが移住者であることを隠していて、特に思春期の子どもたちは、移住者がどのような扱いをされているか解るような年齢なので、そのような傾向がありました。小さな子どもたちは、家に帰ってきて「チェルノブイリ人って言われたよ」とかストレートに言えたけど、思春期の子どもたちには大きなストレスになったと思います。私の次男は、引っ越した時には（小学校の）二年生で、その当時はさほどストレスは感じなかったようですが、中学校の１−２年生になって、やはり自分が移住者であることを言わなくなった時期がありました。今はもう大人になって、そのようなことは感じなくなり、自分から進んで移住者だと言っています。

フクシマ事故後も同じような差別があったと聞き、残念に思います。日本では、残念ながら多くの場所に原発があり、核廃棄物の問題も沢山あり未解決のままです。もしかしたら全国どこでも事故が起こるかもしれない。自分のところで繰り返されるかもしれない。他人事ではないはずです。私は今ではこのように思っています。「私はチェルノブイリの被害者だ」「私は福島の人間だ」と、もっと言うべきですし、私はそのように言っています。「それで、私とあなたとどこか違いますか？」というふうにして、話していくことがいいのではないかと思っているのです。

ヒロシマ・ナガサキ、フクシマの被害者と同じ思いを実感
多くの人々と交流し、次の世代に語り継き、核のない平和な世界をつくろう！

なかなか世界から核というものはなくなりませんが、軍事的な核利用は当然ですが、「平和な核」も人間に害を及ぼすものです。そして、今では核廃棄物の問題もとても大きな問題になっています。原発というものは、電気を消すようにスイッチを消せばそれで止まるというものではありません。稼働していなくても、廃炉にするためには沢山の人々が長い間、被ばくしながら働かなければなりません。

原水禁世界大会では、沖縄の活動家の方とも話しをする機会がありました。沖縄にもアメリカの軍事基地があって、住民への被害をとても心配されているとのことでした。また原水禁大会には韓国人被爆者の方も参加されていましたし、中国の研究者の方や、アメリカの平和活動家の方、ドイツの「緑の党」の女性とか、沢山の方々が参加されていました。全ての人々が、核兵器、軍事基地、そして原発に反対しています。

大阪では「ピースおおさか」というミュージアムに連れて行ってもらいました。そこで私は、大阪も空襲に遭って街が破壊されたことを知りました。ミンスクも同じように空襲を受けましたので、同じだなと思いました。私はソ連時代に学校や大学で勉強し、もちろん日本の歴史も学び、広島・長崎の原爆投下についてはよく知っていましたが、他の大都市が大阪のように大空襲を受けて、街がほとんど破壊されたということは初めて知りました。

ピース大阪で、展示物を熱心に見る

長崎では原爆資料館の他に、「岡まさはる記念平和資料館」にも連れて行って貰いました。そこでは、日本軍が近隣諸国を侵略・占領してどのようなことを行ったかということについて、沢山の資料が展示されていました。日本の市民は今もその当時のことを忘れずに、被害者でもあるけど、加害者でもあったという真実を伝えているという。これはすごく難しいことだと思いますが、そのようなことをされていることも知りました。そういった真実を話していくというのは、大変勇気のいることだと思います。

私はこのようにいろいろと自分の体験を講演させて頂いて家に帰ると、「ああ、もう私は二度と講演などには行かない」と思うのです。でも時間が経つと、やはりとても辛く重い体験をしたということを思い出して、心が苦しくなって、こういう苦しみを感じる人が二度と出ないように、他の人がこのように苦しまないようにと思い直して、このようにお話をしています。

今回、多くの広島・長崎の原爆被爆者の方々や、福島の原発事故被害者の方々とお会いしました。彼らもどのように避難をしたのかとか、いろんな所でいろんな苦労があったことを私に話してくれて、同じような思いを持っている人たちがいるということを知りました。そして今日ここにも、私たちの問題に対して無関心でない方々が集まってくれていて、その中には「救援関西」のメンバーの方々のように、私が古くから一緒に活動してきた沢山の知り合いがいます。日本は、核被害に無関心でない方々、優しい方々がいる、とても美しい国です。また、今日の昼食の時には、若い方々とも一緒に話しをさせて頂きました。このようにして、沢山の人々と交流をしていくことで、私たちは平和な世界を作っていけるのではないかと思います。

これから私たちは子どもや孫に私たちの経験を伝えていかなければならないと思います。実は、私はそのような話しをすでに自分の孫たちにはしていて、私の孫たちはチェルノブイリ事故のことを大変よく知っています。このような体験を語り継いでいかなければなりません。

今日は皆さん、どうもありがとうございました。

（ジャンナさんは、日本滞在中に広島・長崎・大阪・福島で計５回の講演と、数回のスピーチをされました。大阪集会での講演の記録ベースに、各地でのお話の内容を加えて事務局で編集しました。）

馬場町長を偲んで

去る６月２７日、馬場有、前浪江町長が永眠されました。享年７０歳でした。

馬場さんは、大地震と大津波、そして東京電力福島第一原発事故…国や東電からは、原発の爆発、放射能汚染の情報が一切知らされない中で、町民の救助と避難の「陣頭指揮」を取られました。「原発事故がなければ、助けられる命もあったのに…」「放射能汚染も知らされず、あの時、避難先の津島の校庭で遊んでいた子どもたちの姿がまぶたから離れない」と、繰り返し「無念」の想いを語っておられました。一瞬のうちに、それまでの生活、生業を奪われ、そして放射線被ばくによる生涯にわたる健康不安を強いられ、塗炭の苦しみを与えられたことに対し、町として東電に賠償を求め ADR 集団申立を行い、「検診と医療費無料化の制度構築は国の責務」と、「放射線健康管理手帳」を町民に交付し、その法制化を国に求め、先頭に立って闘ってこられました。「どこに住んでいても浪江町民」「事故原因も究明されていないのに、風化をさせてはならない」「国や東電は責任を認めるべき」と訴え、政府や電力会社が責任をとらずに原発再稼働を進めていることを批判、「第二原発の廃炉を」「原発のない社会、日本をめざそう」と呼びかけられました。胃がんで手術をされた後も、ずっと町民のために仕事をされながら、県内のみならず全国にも出向いて、本当に休む間もなく訴えてこられました。最後まで現役で闘い続けてこられた馬場さんに、心からの感謝申し上げたいと思います。そして「お疲れさま」と。馬場さんが想い半ばに逝かれた無念と残された課題を、私たちが引き継いでいかなければと思います。

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」事務局

ジャンナさん福島訪問　（８月１０日～１２日）

≪浪江町役場を表敬訪問≫

10 日は、長崎から福島へ飛行機・列車・車を乗り継ぎ遠路の旅。

福島県いわき駅に列車が到着して、楢葉町の佐藤龍彦さんに迎えてもらい、そのまま車で約 1 時間。浪江町役場を表敬訪問しました。2016 年、ジャンナさんは浪江町の馬場前町長さんに、当時全村避難していた間に町役場が置かれていた二本松事務所や、大阪で行われた国際シンポジウムでお会いしました。震災・津波と原発事故の被害による「無念」の思いを語られ、町民のために尽力された馬場さんの姿にジャンナさんは感動し、ベラルーシでもそのことを皆に伝えたそうです。ジャンナさんは、この 6 月に亡くなられた馬場前町長へのお悔やみの言葉を述べました。そしてその重責を継いでおられる吉田新町長さんや、馬場さんと一緒に浪江町の「健康手帳」を作成した紺野議員（元健康保険課長）らとしばしの交流を持ちました。

≪広野町の復興住宅で　「失った本当の家」≫

11 日は、広野町にある新築の復興住宅で、自治会副会長の細川さんが待ってくれていました。

2016 年から 20mSv／年基準で次々と避難指示が解除されていく中で、多くの人が移住するか、故郷に戻るかの決断を迫られました。避難指示が出された楢葉町に隣接している広野町のこの復興住宅には、2017 年 11 月から、あちこちの避難所や仮設住宅を経て、浪江から楢葉までの 5 町村からの 53 世帯が入居しています。ペットと一緒に住めることが特徴の一つです。

細川さんは、ジャンナさんとは初対面です。はじめは緊張されていましたが、少しずつ、今までの経過を話してくださいました。

（この復興住宅は）若い人は少ない。小学校・中学校合わせて子どもは 5 人くらい。高齢者が多いので、すぐ介護が問題になる。買い物が不便。巡回バスが回ってはいるが行くところは大体決まっている。自分で車を運転していかないと何事も用は足せない。いろんな所から来た人達で、それに集合住宅ではないので、どうしてもバラバラで、交流を企画してもなかなか参加しない。人との交流をしたいが集まらないのが、今の悩みであるなど。「チェルノブイリで３２年、私たちは 7 年なんですけど、全然知らない町に行って人との交流とか、そういったことには大変苦労をされたでしょうね。」

ジャンナさんも応えて、自分のことを話されました。「私たちは『移住者の会』を始めた頃、アパートの 1 戸ずつ訪ねて、どこから来たのか、家族構成などを聞いて調査しました。」「ここに来て同じような家が並んでいるのを見て、それぞれ、もとの、本当の家を持っていて、そこに庭があって、畑を耕したり花を植えたりしていたのだろうなあと思ってとても胸が痛みました。私も同じような状況でした。」「移住する前の町とミンスクとは気候がちがっていて、ミンスクは寒くて、私たちが住んでいたところは少し暖かかった。それに自然が違います。私たちの地域にはきれいな小川があって…」

その言葉に細川さんは「ありましたねえ…。同じなんだねえ。」「やっぱし浜の方が環境があっている。海見るだけでも心がやすらぐんだねえ。郡山だと生活するには何不便はないのですけど、ただ、個人的にはこっちで育ったもんだから、やっぱり環境はこっちの方がいいですね。」と、応えます。

ジャンナさんがナローブリアからミンスクへ移住した経緯を話すと、細川さんも震災、事故直後の避難の経緯を語ってくれました。「もとは宮城県の出身だが、富岡に住んで 45 年。ここを終の棲家と思っていたところに被災した。」「あの日、東電の社員だけ原発の放射能漏れを知っていて、大熊、双葉の社

員は夜の間に避難したが、町民には知らされなかった。12 日の朝に川内村に避難しろと言われ、イヌ 4 匹を車に乗せて避難した。川内村に行くと、また原発が爆発したということで、川内村にも避難指示が出た。郡山のビッグパレットへ行くと 3000 人もの人がいて、足の踏み場もないくらいに溢れていた。自分は持病があったので、感染を恐れて避難所には入らず、イヌと一緒に車で過ごした。２－３週間そこにいてから、さいたまへ、そして３ヶ月後に郡山の仮設住宅に入居した。」「避難していて一番困ったことは薬を貰うこと。大手術もし、持病があり薬は欠かせない。富岡に帰っても医者や病院がそろっていない。」

ジャンナさんも被災者の健康の問題を話されました。「ベラルーシは（被災者でなくても）医療は無料ですが、待ち時間は長く、薬は有料です。今も健康の不安を抱えています。被災者の健康へのサポートを充実してほしいと要求しています。」と。「今、お話をお聞きしていて、ほんとに細川さんは、私のことを話されているのではないかと思うくらい、全く同じような状況で…」と、互いに初対面とは思えないほど共通の思いを感じておられるようでした。

最後にジャンナさんのお孫さんの描いた絵をベラルーシからのお土産としてお渡ししました。

≪請戸漁港で漁師の高野さんと　「常磐の海を守りたい」≫

地震と津波の被害の爪痕が残る海岸と、帰還困難地域に挟まれた 6 号線を北上し浪江町に向かいました。富岡町から浪江町の間、特に大熊町は線量が高く、2017 年 3 月に一部避難指示解除された浪江町に入っても、駅前は壊れたままの家屋も多く見受けられました。ジャンナさんは「福島事故の被災地に来たのは２回目ですが、車の窓から自然を眺め、そして今、誰も住んでいない家々を眺めて、私は自分の故郷を思い出し、とても辛かった…」と話しておられました。

津波の時、避難場所になった大平山に上ると、浪江で亡くなった 126 名の方の氏名が刻まれた震災慰霊碑が麓を見下ろしています。ジャンナさんは、無言で碑と向き合っていました。

キラキラ海が光る請戸。漁師で浪江町議会議員でもある高野武さんが待っていてくれました。津波の被害が大きかった請戸漁港です。100 隻あった漁船が 5 隻しか残らなかったこと、その日の事を、高野さんは夏の強い日差しにも平然とたたずんで話してくれました。地震が起きた時は自宅にいて、一旦、大平山に避難したが、そこも危険だということで町役場に移ることにした。その前に自宅に毛布を取りに戻り、その数分後に大きな津波が来て…全速力で大混雑だった道を避けて逃げた。逃げた役場の建物の上から見た請戸地区は全部水没して波打っていた。建物はもう何も無く、自分の家も残っていない。原発事故があった翌朝５時頃避難指示が出て状況も分からないまま全町民が避難した。大勢が西側の 30 キロ圏外である津島に避難したが、自分は風を読んで、風向きに垂直の北方に向かい、娘のいた南相馬の方に逃げた。今、港の線量は低いが、第一原発からは直線距離で５km しかないこと等を語って下さいました。

漁に出られる保証もなく南相馬市の借上げ住宅に住んでいたが、「自分は漁師しかない、と漁船を再建した」「この海（常磐）は豊かなんです」「今は試験操業を続け、放射能を測定して市場に出しているが、この３年間で基準値超えが出たのは１件。国の基準は 100 ベクレル／kgだが、県、地元の漁協で 50 ベクレル／kgに自主規制している。」「請戸で水揚げした魚を毎回１時間かけて相馬の漁港の測定所に車で運搬する。魚の鮮度は下がるし、車での運搬の安全性の問題などもある。来年３月にはここ請戸港で測定できるように、また活魚の水槽などの設備も整備したい」と話して下さいました。

「俺らが帰って『大丈夫ですよ』という形を作っていかないと、そのようなデータを積み上げていか

ないと、若い人に戻ってこいとは言えない。」「今は息子と二人で船に乗っています。やっぱり後継者がいるというのは…それはもう、自分だけでできるというような年代ではないし。」と、遠く海を見ながら漁業再建の思いを語ってくれました。また、「請戸では、原発事故のために、助けられた命も助けられなかった。夜になって、また明日…というのが、全部助けられなかった。」とも。

「ベラルーシには海はないのです。船で海に出るのは怖くないですか？」「その場の迅速な判断と行動力が命を助けたのですね」「魚がたくさん捕れますように。ここでまた生活が再建されますように。高野さんが作って下さった魚の飾りが私の台所に飾ってあるので、毎日それを見て、高野さんのことを思い出します。」と、ジャンナさんにとっても印象的な海の出会いでした。

≪浪江町　「OCAFE」「背比べの柱」岡洋子さんと≫

浪江町で「農家の嫁」として働きつつ、町の消防団員でもあった岡洋子さんは、震災と原発事故後福島市に避難しました。不安と焦燥感の日々、町のために何ができるかと考えている時、紙芝居グループ「浪江まち物語つたえ隊」と出会い、今は、各地を回り紙芝居で原発事故で体験した事、浪江の事を伝えることを続けておられます。

浪江町は避難指示が解除されたが、住民は「帰る」「帰らない」「帰りたい」「帰れない」と皆悩んでいます。岡さん自身は移住を決めましたが、「故郷の思い出は残したい。みんなが集まれる場所を作りたい。」と、自宅の倉庫を「カフェ」として改装工事をしたそうです。今回は、その自慢のカフェ「OCAFE（岡さんちのカフェという意味？）」にお邪魔しました。

夏の風が山と川を吹きわたり、取り壊しが決まっている岡さん宅のそばの竹林と杉の木が日陰を作っています。その横に白い窓と木の質感のログハウス。ビックリするくらいお洒落な木の香りの部屋が出来上がっていました。「みんなが集まれる場所」のとおり、つたえ隊の会長小澤さん夫妻や八島さんも集まって、ジャンナさんを囲んで和やかに交流。手作りのレモン水、美味しいカボチャ・里芋・オクラなどを沢山ご馳走になりました。おまけに無理を言って、民話「歯形の栗」の紙芝居までしてもらいました。

ジャンナさんは、美しい風景と取り壊される思い出の詰まった家、そしてその家から取り外してカフェに移した、子どもたちの背比べの跡のついた柱を、うなずきながら見ていました。

≪佐藤さんの楢葉の家≫

夕方になって楢葉町の佐藤龍彦さんの新しい家に伺いました。

佐藤さんもまた、自宅再建を選び、仮設住宅から故郷に戻られた一人です。2011 年の楢葉町のもとの住民 8011 人は、2018 年 3 月末、2929 人。「たとえ賠償されても、帰還を果たしても、移住しても、元の生活が戻るわけではない」と、佐藤さんは、厳しい被災地の現状と向き合っておられます。佐藤さんのお母さん（87 歳）は、いつものとおり、屈託なくお元気で、近所のお友達、奥様と三人でご馳走してくださいました。特に福島産の白ご飯の美味しいこと。

この秋には、佐藤さんは、初めてのチェルノブイリ訪問を予定されています。ソビエト・ロシア・ベラルーシの歴史と現状を沢山の本で勉強されていました。神棚や仏さんを祭った民家の日常生活に触れ、ジャンナさんはこの 2 回目の福島を感じておられました。　　由美

ジャンナさんと広島で再会を喜び合いました

久保　きよ子

8月5日広島分科会

ジャンナさんは、８月５日原水禁世界大会・広島大会「ヒバクシャの現状と連帯のために」の分科会でチェルノブイリ原発事故の被災者として発言されました。

私も久しぶりに広島の大会に参加しました。ジャンナさんが広島で話されることをお聴きし、お会いしたいと思ったからです。今年の日本の夏の暑さは、連日、体温以上の暑さを更新する異常さ、ベラルーシから８千キロの長旅に「体調を崩されていないか」と心配しながらお会いできるのを楽しみにしていました。ジャンナさんの立派な体格の姿が見えたとき、お互い顔がほころび再会を喜び合いました。

ジャンナさんの報告の内容の詳細は4ページをご覧ください。

「もし、広島・長崎への原爆投下がなかったら？」「もし、チェルノブイリ原発重大事故がなかったら？」「もし、福島第一原発重大事故がなかったら？」と、自分に問いかけるというジャンナさんの言葉が印象に残りました。もし核兵器や原発がなければ、ヒバクシャの方々はこのような残酷な健康被害、生きる権利を奪われ、悩まされ続けることもなかったことでしょう。本当にこのようなつらい出来事を淡々と話されるジャンナさんの姿勢から、事故から３２年経った今も、そして、これからも生き続ける人々に「二度とこのようなつらいおもいをさせてはならない」という強いジャンナさんの意思がひしひしと伝わってきました。ジャンナさんのお話を聞いて、やはり私たちは、被害者の思いに寄りそうことが大切だと改めて思いました。今の社会の現実を直視するうえで大切なことです。

誰もが平和に生活を続けられることが、それが当たり前の権利であり義務であるという社会を世界中に作り上げていかねばなりません。戦争をしない、させないこと、核兵器を世界からなくすこと。そして、ジャンナさんから聞いたことを大切に守り育てるためにも脱原発社会を実現すべきです。いったん事故が起これば被害は甚大で長期にわたる原発は止めることです。原発を止めれば、チェルノブリ・フクシマの悲惨な出来事をくり返すことはないのですから。

５日の午後は、ジャンナさんは「フクシマ、ヒロシマ、ナガサキを結んでヒバクを許さない集い―Part１９『今考えてほしい福島事故』」に参加し、連帯のアピールをされました。集いでは「避難校から見た原発震災～教育実践を通して～」とのタイトルで浪江中学校の柴口先生（福島県教組）が報告されました。避難指示が解除されても殆どの子どもが帰らず、生徒数が激減していること、避難する前と後の「二つのふるさと」があり「ふるさと」を教材でとりあげていること、また教材として残さないと原発事故があったことが忘れられていくとなど。自らも避難者でもある先生は「細くて長い取り組み続けていきたい」と結ばれました。また会場からの質問に答えて、子どもたちは淡々と現実を受け入れているがいろんな経験からちょっとした言葉にも傷つくとも話されました。ジャンナさんは、次男が学校で「故郷」というタイトルで作文を書きなさいという課題が出された時に、何も書かなかったということがあって、訳を聞くと「自分の故郷のナローブリアには住んでいないし、今住んでいるミンスクのことはあまり知らないので何も書けなかった。」と話した

とのエピソードを紹介されました。そして故郷を失い、親戚・友達のつながりを失ってしまった「移住者」の境遇、地方の農村から全く環境の違う大都会に移り住んで生きていくことの大変さ、そういうことも発信し、みんなが忘れないようにしなければとも訴えられました。同じ原発事故被害者で、故郷に戻れないお二人、まさに気持ちが通じ合ったように感じました。

ジャンナさん、お疲れさまでした！

日本滞在１０日間のハードスケジュールの最後は、８月 12 日大阪のつどい「～ベラルーシからヒロシマ・ナガサキ、フクシマを訪ねて～　チェルノブイリ・ヒバクシャの想い」でした。

ジャンナさん、この暑さと大移動できっとお疲れだろうなぁ、あんなにギッチリの予定（いつものことですが…）を組んで、ホンマにィ！と思いながら準備に出かけたのですが、お目にかかったジャンナさんはすこぶるお元気そうで、やさしくハグ。一昨年の国際シンポジウムから２年ぶりの再会を喜びました。

大阪集会はお盆にもかかわらず約４０人の参加者で、初めての方も多く、みなさん熱心にジャンナさんの話に耳を傾けておられました。チェルノブイリ事故後の出来事は思い出したくないことばかりで、特に２人の息子を避難させた時に長男さんが病気にかかり後遺症が残ったことは、ご自分の心中に留めておきたいことかもしれません。でも、その辛さを抑えて被災の実態を語ってくださいました。

「講演旅行から帰ると、もう２度と行かないと思うけれど、やはりこれ以上の被害が生じないように、世界から核をなくすために、次のミッションに応じることになる」と仰っしゃっていました。「フクシマでは、関心を持った方々が来てくださり嬉しかった。交流をしていくことで平和な世界を作っていく」とも。

参加者からの質問は、「チェルノブイリ法」について、ヒバクシャ差別の問題、移住者の会の運営、ベラルーシに建設中の原発について…など多岐にわたり、“救援関西”にもたくさんの宿題が出されました。

顔の見える交流を続けてきたことで、チェルノブイリの被災地に住む方々を遠くの親戚のように感じ、人情の厚さに気持ちが温かくなります。ずっと前に言われた「事故が起こって何ひとつ良いことはなかったけれど、あなた方と知り合い仲よくなれたことは唯一の喜びです」という言葉を噛みしめました。

（昨年、ジャンナさんのプレゼントとして持って帰ってもらったかぼちゃの種を田中農園で育てて出来た、大きなオレンジ色のかぼちゃを参加者と分け合いました。みなさんおいしかったですか？）

田中あ

2018 年夏　ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ

特別な酷暑と特別な台風の今年も、京都南丹のゴーゴーワクワクキャンプは40日の長丁場オープン。私たちも振津医師の「メデイカルチェック」で、7月３１日と８月１５日、おじゃましてきました。

東日本大震災と原発事故のための保養を 2011 年直後から続けているのは簡単なことではありません。中心メンバーの頑張りとブレのなさもありますが、来た人がまた来たくなる、多くの共感支援する人々が集まりたくなる、ホッコリした「力」・・・名付けて「ホッコリ力」があるような気がします。

川で水遊び

今年は７月から猛暑でいろんなイベントが中止になったり、台風で交通機関が麻痺したり、スズメバチが大発生したり、ほんとにチョット怖かった。大阪・京都の町中は、冷房がないと耐えられないオーブントースター状態ですが、京都縦貫道を降り、山間部を抜けると、山と川に挟まれた水田が広がり、日差しは強いが、風が吹くと稲がオイデオイデをしていました。曲がったあぜ道の先に、大きな古民家。洗濯物の間からメンドリと、それを追いかける子どもが顔を出し(笑)、いつものように、みんなそれぞれのんびり、子どもたちとスタッフががやがや。ゲームをしたり、本を読んだり、バドミントンをしたり、虫取りしたり。冷房もコンビニもないが、井戸水でやかんのお茶やスイカが冷えて、おいしいご飯が三度三度、子どもたちは退屈しません。毎年来ている子は、友達と再会して意気投合。

子どもたちは、すこし入れ替わり、震災以後に生まれた子もいるし、ニーズも少しずつ変っています。お母さんたちは、洗濯物をたたみながら、育児談義。「一人っ子だからこんな大家族はうれしい」「親子二人だと煮詰まることも(笑)ね」「直後も心配だったけどなにもできなかった。京都まで来るのは初めてです」「こんな居場所はなかなかないんです」「日本は、『ねばならない』が多いですよね」「チェルノブイリでは今もみんな病気なんですか」思ったことを口にしてちょっと笑う方もおられます。福島だけでなく、周辺地域で、被ばくを心配しつつ、心開いて落ち着ける場所のない人も居られるでしょうし、３，１１のあと、多くの事に適応できない家族も、子どもたちもきっとたくさん居られるのだと思います。来ていただけるのは極一部の方ですが。ゴーワクは、黙って居場所を提供し、時間を過ごしてもらうことで自ら癒される場を作るように心がけているように見えます。…勝手な観察。

ともあれ、子どもたちの健康チェックはおおきな病気もなく無事にすみました。暑さ対策や安全管理、かなり気を使われていると察しました。

由美

「放射線のホント」撤回を求める全国署名にご協力を！

復興庁から今年３月に出されたこのパンフレットは、見るからにカラフルで楽しい絵もあり、思わずページをめくりたくなります。しかし、内容はとんでもないひどいものです。事故を起こした国と東電の責任は問わず、問題をすり替え、ウソを重ね、事実を見ず歪曲して、東電福島原発事故の被ばくによる健康被害を否定し、事故は終わったものにしようとするものです。

今まで政府は「復興・再生」の名のもとに、20mSv／年の被ばく基準で避難指示の解除を進め人々の帰還を促してきました。一方で賠償の打ち切りや被害者支援の切り捨ても進められています。しかし、

放射能汚染が残り、事故も収束せず、インフラも整わない等多くの困難がある中で、当然ながら特に子育て中の若い人を中心に帰る人は少ないままです。その現状を前にして政府は事故被害を風評被害、差別・偏見だけに矮小化し、その主な要因を「放射線に対する正しい知識」や「食品中の放射性物質に関する検査結果」「福島県の復興の現状」等の周知不足と決め込み「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」を打ち出しました。そして広く国民一般に知ってもらうために関係府省庁が全力で取り組むとしています。「知ってもらう」「食べてもらう」「来てもらう」の視点のうち、最初の「知ってもらう」ために「シンプル」にまとめたのがこの冊子です。

こんな冊子が大々的に全国で宣伝されていけば、本当にフクシマ事故の被害はなかったものにされ、事故は終わったものにされてしまいます。ましてや子どもたちを少しでも放射能から遠ざけ、伸び伸びと過ごさせたいと頑張っている保養の取り組みも必要のないものとされてしまいます。

「救援関西」も呼びかけとして加わっている７月に行われた政府交渉の中で、この冊子の撤回を要求しましたが復興庁は拒否しました。（同封のチラシを参照ください。）

何としても事故を終わったことにして、2020 年の東京オリンピックで福島の復興をアピールし、また原発の再稼働を進めたい政府の頑な姿勢を崩さなければなりません。

全国にこの署名を拡げて政府に突きつけ、「放射線のホント」を撤回させましょう。

どうぞ署名にご協力をよろしくお願いいたします。周りの方にも進めてください。

併せて団体賛同も募っていますのでこちらもよろしくお願いいたします。

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

（2018.5.30~2018.10.1）

小森幸子　田岡ひろみ　田原良二　尾崎一彦　堀口眞也　中山一郎　熊沢滋子　野田暢子　斎藤直樹　碧海宏　稲田みどり　坊上信子　坂岡隆司　相沢一正　藤田達　加堂妙子　田川克孝　奥谷恵子　大泉尚子　山本英子　田中恭子　富田洋香　長沢由美　木村英子　宇野田陽子　山崎ひろみ　田中道子　大田美智子　林みどり　崎山昇　梅原桂子　佐藤ちい子　堀田美恵子　上島博　池本ゆり子　原発の危険性を考える宝塚の会　川辺比呂子　匿名１名　（順不同・敬称略）

♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣お知らせ◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣

＊「プルトニウム保有量削減方針で訪れた好機をどう活かすか？」討論集会

日時:10月14日（日） 午後１時半～4 時半

場所:福島区民センター 301 号室

主催:若狭連帯ネットワーク （問合せ クボ 080-5710－8317）

＊反原子力デー 関電申し入れ行動（予定）

日時:10月26日（金） 午後 4 時

主催:若狭連帯行動ネットワーク （問合せ クボ 080-5710－8317）

＊戦争はいやや！核なんかいらへん！2018 （チラシ参照）

日時:10 月 28 日（日） 午前10時～午後 3 時

場所:長居公園 南児童遊園

主催:実行委員会 （問合せ テラサワ 06-6653-0038）

＊チェルノブイリ･ヒバクシャ救援関西 発足27周年のつどい

～フクシマからチェルノブイリ視察・交流したゲストを迎え、訪問の報告を行います～

日時:12月 9 日（日） 午後１時半～4時半

場所:大阪市立総合生涯学習センター 第1研修室

カンパ・会費の納入のお願い

猛暑の夏も終わりました。皆さまのご協力で、ささやかではありますが、チェルノブイリ・フクシマの子どもたちの保養に協力することができました。またベラルーシからヒバクシャをお招きし、交流を深めることもできました。本当にありがとうございました。そして 10 月末から 11 月にかけて訪問団がロシア・ベラルーシのチェルノブイリ被災地を訪問し、更に交流を深め支援を届けたいと思います（1 面参照）。重ね重ねのお願いで恐縮ではありますが、皆さまのご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

なお事務作業の都合上、振込用紙を皆さまに入れさせて頂いております。なにとぞ宜しくご理解のうえ、ご容赦とご協力をお願いいたします。

ニュース発行:チェルノブイリ･ヒバクシャ救援関西事務局
連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

Tel ： 072-253－4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替:00910-2-32752